

館長コラム

「春草の色彩」

滝沢 具幸

昨年の秋、近くの溪谷を散策した。既に晩秋。谷を覆う木々は深い辰砂色の紅葉に色付き、左右の枝はさまざまな色が重なり合って、谷は奥深い。一人そこに佇むとき、私は重厚な色彩の綾の中に包まれた。そしてこのとき、ふと春草の「菊慈童」の絵を思い出したのである。

今年は菱田春草が没してから、100年になる。この九月から本館は、春草没後100年を記念して特別展を開催することとなった。

この展覧会は春草晩年の装飾的傾向の作品を中心に展示する。あわせて同時代の作家の琳派風の作品も展示する予定である。春草は短い生涯の中でも作風は変化しながら、多くの傑作を生んでいる。その中で今展をとおして春草の色彩について考えてみたいと思った。

展示に先立って、私は当館の学芸員と「菊慈童」と「春秋」をじっくり観察・研究する機会をもった。そして「菊慈童」の幽玄、深遠な世界と、「春秋」の静けさに包まれた簡素で穏やかな情趣に改めて感動したのである。

「菊慈童」の技法は絹地に岱赭・黄土・古代朱や焼緑青を置き、刷毛を使ったぼかしにより深い空間性を出している。明度を落とした画面は一瞥すると暗い印象を受ける。春草はなぜこのような暗紫色系の不透明にも見える混色法を用いたのであろうか。画面にじっくり対峙し見つめていると、その複雑な色調の中に印象派が試みた光の分析に近い技法が隠されていることに気付く。その重厚な色相の中に、奥底で密かに輝いている色のあることを

発見する。そして朦朧体と言われたこの実験的な新しい技法は、後年の春草の作品へと繋がってゆくのである。

春草の作品は後年、次第に琳派風の装飾的な明るい作品へと変化してゆく。中でも今回出品予定の「春秋」は、琳派的要素が明快に表われている作品である。この作品は双幅仕立てで、それぞれ画面の背景は暖色系の色に胡粉を加えた(具のものという)柔らかな平面空間を用いている。右幅(八ツ手に^{いたち}鶉)の八ツ手の葉脈は金泥の線で描かれ、左幅(楓に^{かえて}鳩)の楓は華やかな黄色で全て正面性に描かれ美しい装飾効果を生んでいる。穏やかな色彩対比であるが、補色に近い配色効果を巧みに用いた表現である。宗達、光琳が使った金銀箔に代わる絹地を用いた装飾的技法である。

私は、春草には生まれ育った信州の色彩が体質の中に組み込まれているように思う。それは信州伊那谷の固有の色ではないかと感じる。あの美しい色相は赤石、木曾の両山脈の稜線を越えてくる光の屈折によって生み出され、互いに輝きあって眼球の奥に留まる。春草は故郷の光の中で美しい色感を得たのである。

春草の作品は冷静にして理智的であるとの評も多い。しかし私は彼の作品の色彩の中に、並々ならぬ強い感情と情熱が宿っていることを感じる。それは春草の魂の中に潜む、春草自身の色の質なのである。

飯田市美術館 二ユーエス 発行日/2011年9月1日 印刷/杉本印刷株式会社 発行者/飯田市美術館 〒439-0034 長野県飯田市道守町2-655-7 TEL 0265-22-8118 URL <http://www.iida-museum.org/>
© 2011 Iida City Museum ※本書を無断で複製・転載することを禁じます。



「落葉(部分)」菱田春草(1909) 福井県立美術館蔵

CONTENTS

菱田春草没後百年記念特別展
春草晩年の探求 - 日本美術院と装飾美 -
(9/3 ~ 10/2)

特別陳列
瑠璃寺と天台の秘宝
(10/8 ~ 11/13)

新指定の飯田市文化財①
菱田春草筆「靈昭女」「帰樵」「春秋」



「秋色」横山大観（1917）個人蔵



「賢首菩薩」菱田春草（1907）東京国立近代美術館蔵



「柿に猫」菱田春草（1910）個人蔵

1 9/3(土) ~ 10/2(日)

菱田春草没後百年記念特別展

春草晩年の探求－日本美術院と装飾美－

明治7年(1874)9月21日に飯田、仲之町で生まれた菱田春草は、明治31年に日本美術院の結成に参加して、僚友の横山大観や下村観山たちとともに朦朧体の画風を研究し、日本画の近代化に貢献しました。そして明治40年代には朦朧体から脱して装飾的な画風へと進み、数々の名品を手がけていきます。しかし明治44年(1911)9月16日、慢性腎臓炎のため満36歳という若さで没しました。

平成23年(2011)は菱田春草が没して百年という節目の年にあたります。そこで飯田市美術博物館では、春草の最後の画風となった装飾的傾向に焦点をあてた展覧会を開催します。本展では、初期から晩年までの春草の画業を概観しつつ、明治40年代に描かれた名品の数々を紹介します。また春草と深い影響関係にあった横山大観や下村観山、木村武山の大作も展示して、春草たちが明治40年代を通じて探求した「装飾美」をご覧ください。



「鶴鷗図(右隻)」下村観山（1901頃）滋賀県立近代美術館蔵



「鶴鷗図(左隻)」下村観山（1901頃）滋賀県立近代美術館蔵

▶ 開幕講演会「技法と表現からみる春草の装飾美」

開催日時：9月3日(土) 午後1時30分～
講 師：滝沢具幸(当館館長)
受講料：無料

▶ 特別講演会「明治の琳派と春草・大観」

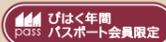
開催日時：9月19日(月) 午後1時30分～
講 師：玉蟲敏子氏(武蔵野美術大学教授)
受講料：無料

▶ 展示解説会

開催日時：毎週日曜日午後3時～
受講料：観覧券が必要です

▶ パスポート会員向け解説会

開催日時：9月9日(金) 午後5時30分～



休館日：9月5日(月)・9月12日(月)・9月20日(火)、9月26日(月)
観覧料：一般500円(400円)/高校生300円(250円)/小中学生200円(150円)
()は20名以上の団体料金

※春草命日(9月16日)と春草誕生日(9月21日)は特別無料観覧日となります



「紺紙金字般若心経」下伊那郡高森町・瑠璃寺蔵

2 10/8(土) ~ 11/13(日)

特別陳列

瑠璃寺と天台の秘宝

いまからおよそ千二百年をさかのぼる弘仁6年(815)、天台宗を開いた伝教大師最澄は東国巡化に旅立ち、難所を越えて伊那谷入りしました。そして信濃国をはじめ上野(群馬県)や下野(栃木県)に天台の教えをひろめていきました。かくしてこの地にも最澄の教えが根付いたのちの天永3年(1112)、大嶋山瑠璃寺(天台宗 下伊那郡高森町)が創建されます。

眼前に屏風のごとく連なる伊那山地、眼下にはのどかな田園風景を見渡す勝地に境内を構え、瑠璃寺は南信地域における天台宗の中心寺院のひとつとして、源頼朝や武田信玄といった有力者たちの庇護を得て大いに栄えてきました。同時に伊那谷の屋台獅子舞発祥の故地としても知られています。そして九百年もの長い歴史のなかで守り伝えられて宝物類は、戦禍などで失われたものも少なくありませんが、それでもなお当地随一の古刹にふさわしい質と量を誇っています。

そして平成24年(2012)に開創九百年という節目の年を迎えます。そこで本展覧会では、瑠璃寺を中心に密教関係の仏画類などおよそ20件の宝物をご紹介します。当地域の仏教文化の懐の深さを実感していただければ幸いです。

ところで、今回注目していただきたいのは「紺紙金字般若心経」というお経の巻物です。紺色に染めた紙に金泥で経文を書写した本品は、表紙には宝相華の唐草文を配し、見返し部分には観音菩薩を中心に菩薩や比丘、礼拝者を周辺に描き浄土の様子をあらわしています。また流水や土坡などの自然描写に銀泥を用い、観音菩薩の住まう補陀落浄土を幽玄に演出しています。平安時代の後半期、こうしたきらびやかな紺紙金字経が数多く書写されました。本品は、優品が数多く制作された同時代の作品と比べても遜色のない出来映えで、しかも当地はこの種の作例に恵まれていないので、たいへん希少な遺品です。

会 期：平成23年10月8日(土)～11月13日(日)
休 館 日：毎週月曜、11月4日
観 覧 料：一般310円(210円)/高校生200円(150円)/
小中学生100円(80円) ()は20名以上の団体料金
主 催：飯田市美術博物館
協 力：瑠璃寺
付属事業：①講演会「伊那谷の天台寺院と瑠璃寺の仏教美術」
10月23日(日)13:30～
②パスポート会員向け特別解説会
10月21日(金)19:00～21:00



「帰樵」菱田春草（1906）

3

新指定の飯田市文化財①

菱田春草筆「霊昭女」「帰樵」「春秋」

平成23年7月20日に新たに飯田市文化財として、当館所蔵の菱田春草作品6点と春草会所蔵「武具の図」、下伊那教育会所蔵の菱田春草書簡69点が指定されました。今回は、そのうちの3点をご紹介します。

「霊昭女」は、中国唐時代に禅の修行をした龐居士の娘霊昭女を描く作品です。竹籠を手を持って立つ美人は、修行中の父の生活を助けて竹製品を売り歩いたという孝行娘の姿です。春草が絵の研究に励んだ日本美術院では、毎回の課題に対して作品を寄せる研究会、互評会が行われました。「霊昭女」は「端妍(容姿が整っていて美しい)」という課題に対して描かれた作品で、姿形だけでなく凛とした心の美しさまでも表現しています。国の重要文化財である「王昭君」に通ずる色彩を持った作品であり、互評会での履歴が明確な作品として評価されました。

「帰樵」は、春草が欧米遊歴から帰国して後に描かれた作品です。この頃の春草は朦朧体と批判された色彩の曖昧さを取るための研究を続けていました。一時の色の混濁は克服され、やわらかな色の階調が心地良い作品を生み出しています。何気ない風景を色彩豊かに描き出した帰国後の作風がよくうかがえ、春草のこの時期の特徴をよく示している作品として評価されました。

「春秋」は、名作「落葉」「黒き猫」が描かれたのと同時期の作品です。朦朧体から離れて、新たな日本の装飾絵画への研究を行っている作品の一つです。色彩が明瞭になり、朦朧体にはなかった線も復活しています。そして、絵画の平面性や面白味に注目しはじめています。春草芸術の成果を示す重要な作品の一つとして評価されました。



「霊昭女」菱田春草（1902）



「春秋(右幅)」菱田春草（1910）